

805

入院高齢者の離床時間と身体機能

高柳公司¹⁾・平野真貴子¹⁾・野口浩孝¹⁾・近藤隆史¹⁾
原口規子¹⁾・大城昌平²⁾・中野裕之³⁾

- 1) 医療法人社団東洋会 池田病院 リハビリテーション部
2) 長崎大学医学部附属病院 理学療法部
3) 長崎大学医学部保健学科 理学療法専攻

key words

高齢者・離床時間・身体機能

【はじめに】高齢者の機能維持や寝たきりを予防する為には、離床を促進することが重要である。当院においても患者食堂での食事の推進や、積極的なリハビリテーション、病棟でのレクレーション（病棟レク）などによる、離床時間の延長に取り組んでいる。本研究は入院高齢者の離床時間と身体機能との関連を検討した。

【対象と方法】対象者は当院に入院中の高齢者で、リハビリテーションを実施している厚生省「障害老人の日常生活自立度」（寝たきり度）判定基準でBランク以上の57名（男性16名、女性41名、平均年齢79.8±10.0歳）であった。離床時間は坐位及び立位になっている状態とし、担当理学療法士と看護婦（士）などが1日の生活状況を直接観察、記録した。その他に移動能力（独歩群、W/C駆動群、坐位保持群に分類）、寝たきり度、行動意欲（Vitality Index：VI）、ADL評価（修正版Barthel Index：BI）、痴呆の有無（HDS-R）、転倒の有無（過去1年間）、病棟レクへの参加率（参加率）について調査した。また、上記全対象者の中で1年以上入院し、病状悪化に伴う身体機能・能力低下例を除いた31名（男性6名、女性25名、平均年齢80±9.6歳）を対象に、移動能力および寝たきり度について、現在（本研究調査時）と過去一年間の変化状況を調べた。解析方法は離床時間と各調査項目との関連について単変量分析（t検定、Wilcoxonの順位和検定、 χ^2 検定、Spearmanの順位相関）を行い、次に移動能力と寝たきり度の推移と離床時間との関連についてロジスティック回帰分析を行なった。ロジスティック回帰分析の目的変数は過去一年の推移から移動能力および寝たきり度を維持・改善もしくは低下の2群分類、説明変数を性、年齢、BI得点、痴呆の有無、転倒の有無、離床時間とした（尚、共線性を考慮した）。

【結果と考察】離床時間は移動能力分類、寝たきり度、VI得点、BI得点、参加率と有意な関連があり（ $p<0.01$ ）、離床時間の長い高齢者ほど、移動能力や身体機能、行動意欲、ADL能力が高いと考えられた。ロジスティック回帰分析の結果は、移動能力および寝たきり度の維持もしくは低下と、離床時間は有意な関連があり（ $p<0.01$ ）、離床時間は移動能力および身体機能の維持に関連していると考えられた。以上より、高齢者の身体機能の維持・改善には、離床時間の長さも重要な関連要因であると思われた。離床時の過ごし方など質的要因との関連について検討することが今後の課題である。

806

日常生活活動の価値序列

一対比較法によるアンケート調査

堤 文生

九州リハビリテーション大学校

key words

日常生活活動・価値序列・一対比較法

【はじめに】障害者のリハビリテーションの主な目標は、日常生活活動（ADL）の自立である。ADLの価値観には性別、年代別、障害度別に相違が見られる。今回、健常者及び障害者におけるADL項目の価値序列のアンケート調査を行った。【対象及び方法】対象者は、健常者4040名と入院患者1049名のデータを回収した。質問内容は、長尾らの報告に準じ意志伝達から趣味までの平易な文章を用いた。

- (1)『自分の思っていることが人に伝えられない』（意志）
- (2)『人づきあいができない』（交際）
- (3)『一人で風呂には入れない』（入浴）
- (4)『一人でシャツ、ズボンが着れない』（更衣）
- (5)『自分で身繕い（歯磨き、洗面等）ができない』（整容）
- (6)『一人で食事ができない』（食事）
- (7)『一人で便所が使えず、お尻もふけない』（排泄）
- (8)『家の中で必要な所まで一人で行けない』（屋内移動）
- (9)『通勤、通学、買物が一人ではできない』（屋外移動）
- (10)『仕事、家事が一人ではできない』（仕事）
- (11)『趣味が手伝ってもらわないとできない』（趣味）

調査方法は、一対比較法を用い、11項目の中から2項目ずつを取り出した55対を無作為に配列した質問用紙を作成し、『できなくなったらより困る項目』を二者択一にて記入する。統計処理は自作のソフトを用い、項目間の一元的価値観の有無を検討するため、一対比較の勝敗表にて解析した。

【結果及び考察】健常者及び障害者の各年代（10代から70代）における価値序列は性別、年代別に特徴的な序列パターンを呈した。排泄や食事は上位に位置し、意志伝達や交際は若年層では上位を占めるが年代とともに下位に移行する。仕事は、健常者の40から50代、障害者の30代において高い序列を示し社会的役割の強さが伺える。高齢者層では排泄、食事、入浴、更衣、整容の基本動作が優位を占め、意志伝達、交際、仕事、屋外移動、趣味等の対人関係や社会的活動が低下する。各個人における価値序列の位置付け化を目的に、各年代の健常男女100名ずつを無作為に抽出し、11項目の勝ち数を変数として主成分分析を行った結果、第1主成分は意志伝達、交際、趣味などの対人的活動が正の値を示し、入浴、更衣、整容、食事、排泄などの身の回り動作や生命維持的動作が負の値を呈した。5089名の主成分得点を二次元平面にプロットすると、多くの高齢者層は第3象限に位置付けられ排泄や食事の価値観が高いことを示す。若年層の価値観は多様であるため主成分得点の分布は高齢者層を核としたハレー彗星状に分布する。